わがまち雑司が谷

第15号
発行所　わがまち雑司が谷
豊島区雑司が谷1-24-14
☎03-3988-7733
発行人　前島　郁子
編集人　田中　邦男
発行日　平成5年8月15日
印刷所　新光印刷株式会社

特集

座談会

日本盲人図書館発祥の地 雑司が谷

座談会　出席者

本間　一夫　日本点字図書館理事長
小池　陸子（みちこ）　雑司が谷一丁目在住主婦
原　裕子（ひろこ）　豊島区女性史編纂員
雑司が谷一丁目在住主婦
豊島区女性史編纂員

文責　小池

小池さん　本間理事長　原さん

日本点字図書館にて

小池原　私達は雑司が谷一丁目に住んでいる主婦です。三年前から豊島区女性史の勉強をしていますが、この度「斉藤百合先生」の事を調べ始め、本間先生の日本点字図書館発祥の地がこの雑司が谷という事を知りましてワクワクしてしまいました。そこで本日お伺いした訳です。お忙しい中お時間をお取り下さいましてありがとう存じます。簡単に先生のご紹介をいただけますか？

本間　私は大正四年十月に北海道西海岸の増毛という小さな町で生まれました。五体満足な子だったのですが、五つの十二月に脳膜炎の熱の為、失明したんです。治療に東京初めあちこちかけずり廻っている間、八年がすぎました。昭和四年に函館盲唖院に入りました。

昭和十一年に関西学院大学、『盲人』の岩橋武夫という人が先生をしていまして、そこだけが『盲人』を受け入れてくれました。昭和十四年に卒業して東京に出て来て借りた家が雑司ヶ谷二－四二六というところでした。昭和十五年十一月十日、日本盲人図書館を開館、日本中挙げて紀元二六〇〇年を祝っている日でした。雑司ヶ谷には半年、戦争の為四年程東京から離れておりましたけど昭和二十三年ここ（新宿区高田馬場）に帰ってきてずーっとここで点字図書館ひとすじという事です。

原　どうして雑司が谷にいらしたんですか？

本間　大学の休み等北海道に帰省する途中、斉藤百合先生のやっていらした「陽光会ホーム」に泊まったり、又発行していた「点字倶楽部」の熱心な読者でもありました。

卒業の直前、百合先生から「ど

うせ図書館をやるのなら、東京はヘレン・ケラーが来た後で諸条件が熟している。すぐ東京に出てきなさい」という熱烈なさそいの手紙をもらいました。

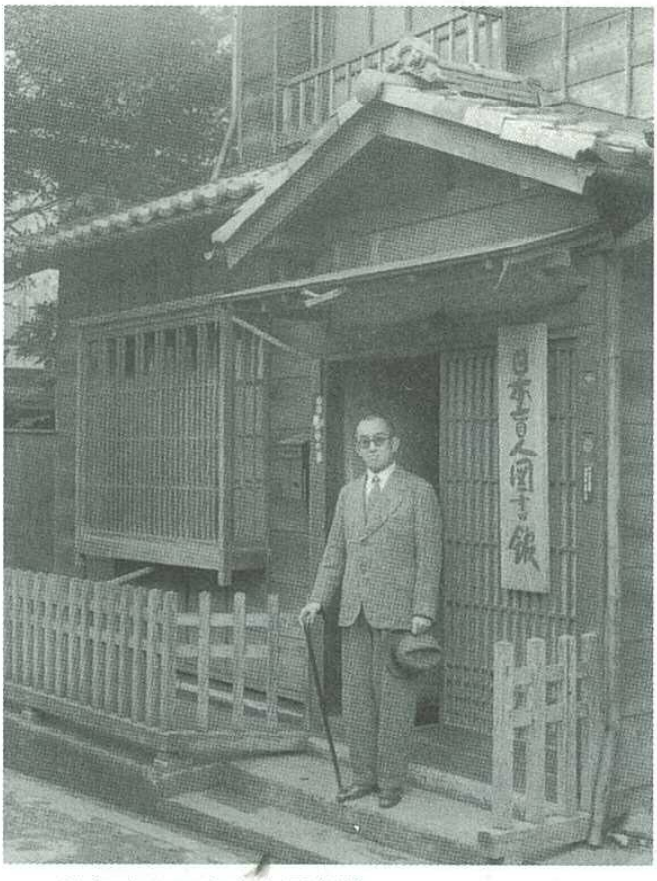
私は盲学校中等部の頃、岩橋武夫先生、熊谷鉄太郎先生という大先輩の講演を聴きまして『盲人』にも広い世界があることを知らされ又好本督先生からイギリスのロンドンには蔵書十七万冊を持つ点字図書館のある事を知らされました。十八才の時です。これこそ私のライフ・ワークと思いはじめたのです。

小池　ご自分のご本で始められたのですか？

本間　いいえ、自分の本もですが買い集めました。七〇〇冊位です。一応図書館ですから机一つと椅子二つ置いて、近くの盲学校から、「図書館が出来たんだって」と学生が読みに来ました。その他は注文を受けての郵送です。盲学校普通科師範に在学していた真船さんが夜だけ来て墨字の宛名書きをやって下さって、『ばあや』が、しょったり持ったりして目白台郵便局に出しに行ってくれました。

『ばあや』は『文盲』でしたが本当に私によくしてくれました。

スタートしたら、友人達が持っている本を寄贈してくれたりもしました。それから、後藤静香先生との出会いです。先生が「肝心の点字の本は、どうやって増やしていくのですか」とおたづねになり、ドイツ、イギリスでは点訳奉仕が盛んに行なわれている事を教えて下さいました。そしてご自身点字を学ばれ、点訳者育成の講習会も開いて下さいました。稲枝京子さんの森田たま著「随筆歳時記」が最初の点訳奉仕書です。二十冊位出来上がってきました。感動しました。宝石の様に貴重でした。後藤先生はご自身の著書「一日一話」を点訳して下さいました。著者自からの点訳はこれだけです。余談ですが、テープライブラリーの方は黒柳徹子さんが「窓ぎわのトットチャン」を田中角栄さんのお嬢さんの田中真紀子さんが「時のすぎゆくままに」を朗読して下さってます。



創立時の日本盲人図書館

本間　一夫（ほんま　かずお）

大正四年北海道増毛町に生まれる。大正九年失明。昭和十年函館盲唖院卒業。昭和十四年関西学院大学専門部英文科卒業。昭和十五年日本盲人図書館（現日本点字図書館）設立、館長となる。昭和二十八年朝日社会奉仕賞、昭和四十二年点毎文化賞受賞。昭和五十二年吉川英治文化賞、昭和五十六年「指と耳で読む」岩波書店より出版。昭和五十七年博報賞、毎日福祉顕賞受賞。昭和六十年勲四等旭日小綬章受章。昭和五十三年より日本点字図書館理事長専任も努める。現在は理事長。

斉藤　百合（さいとう　ゆり）

明治二十四年愛知県豊橋在にて旅浪曲師の子として、野口小つる生まれる。三才の時失明。明治四十一年岐阜訓盲院卒業。大正二年東盲師範科卒業。岐阜訓盲院の教員となる。大正四年斉藤武弥と結婚を期に雑司ヶ谷亀原に居住。小つるを百合と改める。大正七年東京女子大学第一期生として入学。一男三女の母。陽光会ホーム（小石川区雑司ヶ谷一一〇）主催。夫武弥の協力を得て盲女子福祉事

原　先生、お話しを雑司が谷に戻して、「陽光会ホーム」に通うのにはどこを通られましたか？

本間　往きは『ばあや』が送ってくれまして……。帰りは夜なので一人で、ステッキをつきつき、菊池寛さんのところを左に曲り、三角寛さんの前を通り女子大の寮をすぎるとカラン、カランとお風呂やさん独得のくぐもった音が右手に聞こえて……『八百屋』さんと『床屋』さんの間を左に入って宇佐美質屋さんの前でした。

小池　「斉藤百合先生」との思い出をお聞かせ下さい。

本間　私はネ、点字図書館を作るのが目的でしたが学校を出てからしばらくはライトハウスで仕事をしようと最初考えていたんですが、先程申し上げた様に百合先生から長い熱烈な手紙をもらい、岩橋武夫先生にご相談したところ『盲人』福祉の仕事に東も西もないからといわれて、百合先生のもとで福祉の勉強をまずしようと考えました。

母と叔母に連れられて上京したんですが、「陽光会」なるものはひどい建物でした。障子は穴だらけだし、畳は破れて、母達は「こんなところに入るのか」って、あまり賛成しなかったんですが、私は精神の充実したえらい先生だからって許可を取ったんです。

百合先生は明かるい元気な方で暖かさと魅力を感じいろんな人が訪ねて来たものです。『盲人』は皆さびしいですからネ、「あー、いらっしゃい」っていつも明るい声で迎えていました。

東京女子大の第一期生で……理想が高かった、盲女子高等学園を作ろうと考えられたのです。これは実現しなかったけれど、盲女子をどう幸せにしていくかが目的で夢を語りあい朝になってしまった事もたびたびでした。

「陽光会ホーム」では「点字倶楽部」の編集長としてボランティアをしていました。

原　ここに「日本盲人図書館」のお写真があります。この間二人でこのお写真を片手にあの辺りを歩いてみました。このお家はもうありませんでしたが、似た様なお家がまだあのあたりにはあります。先程伺がった町並みは変わっていませんネ。

本間　そうですか？　昨年テレビの取材であの辺りを歩きましたが……　『雑司ヶ谷墓地』に百合先生のお墓があります。なつかしかったナー。私の青春の一ページでした。

小池　どうもいろいろ教えて頂いて、有難うございました。

原　当時の言葉は『　』で囲みそのまま使用しました。

業に生涯を捧げる。女優斉藤美和（民芸）の母。昭和二十二年没。雑司が谷霊園に眠る。

ライトハウス

昭和十年大阪に岩橋武夫により「ライトハウス」設立。ライトハウス運動とは「盲人の幸福を願い、盲人の幸福のために働き、盲人の幸福を喜ぶ」が目的。

▼お詫びと訂正▲

第14号2頁の花のガーデンコンサートのご案内の中でプログラムの雪の上王を女王に、4頁の写真で福島さんと佐々木さんが入れ代わってしまいました。

5頁の3段目28行目の「アメリカ」の本を訳してとあるのを「蘭学書」を訳してに、7頁のお詫びと訂正中、第14号を第13号に謹んで訂正させていただきます。不手際をお詫び申しあげます。誠に申し訳ありませんでした。

編集部